慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	中国近代化過程における音楽教育思想の変遷 : 清末から民国初期にかけて中国唱歌音楽教育の成立過程を中心に
Sub Title	
Author	高, せい(Ko, Sei)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2002
Jtitle	慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.54 (2002.) ,p.81- 83
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成13年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069 57X-00000054-0081

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

中国近代化過程における音楽教育思想の変遷
—清末から民国初期にかけて中国唱歌音楽教育の成立過程を中心に—

高　　せ　　い*

研究課題:

中国の近代は，アヘン戦争の戦火のなかに，清朝政府の敗北とともに幕をあけた。それはまた中国の半植民地化の始まりでもあった。一方同時に，西洋音楽を含む西洋文化が，宣教師を担い手に，急速的に中国に流入し，浸透し始めた。当時の中国にとって，如何にしてそのような状況から脱出して，民族の独立を保全できるかは大前提である。そのために，技術導入，変法，革命という幾つの異なる段階を経て，知識人による辛亥革命を起し，1912年に中華民国を成立した。

民族独立を保全するという絶対的に優先される大前提の統轄の下に，音楽あるいは音楽教育は一見不急不要のものであるが，実際のところでは，清末から，留日学生による主体的な西洋音楽の摂取及び音楽教育の導入は既に本格的に始まった。

日清，日露戦争での日本の勝利をきっかけに，日本が清の手本となり，またそれによって中国では空前の日本留学ブームが起こった。大量の留学生が日本にきて，日本を媒介に西洋文明を摂取した。留学生の大概は技術関連の実学を学んだが，そのなかに音楽・美術に携わる留学生もいたのである。そして留学生によって作られた「学堂楽歌」（既存の歌一欧米の流行歌曲や日本の歌の旋律に中国語の歌詞を付けたもの）は，中華民国初期に新制学校で広く歌われた。またそれによって，中国の学校教育のカリキュラムのなかで，「唱歌」科目の基盤を築いたのである。その中に，最も秀でた作品は，留日学生である李叔同（1905～1910年，東京美術学校）の手によるものである。彼が帰国後浙江第一師範学校で美術・音楽などの芸術教育に携わり，豊子愷等の後進を育てた。豊は李の後を受け継ぎ，1921年に来日し，帰国後に芸術教育者，画家，翻訳家として名を留めた。李叔同と豊子愷師弟は勿論先ず中国の美術界に大いに貢献したにもかかわらず，中国の西洋音楽の受容と一般教育への導入，大衆を対象に音楽の伝播と普及にも力をいれて努めていた。

一方，同じく留日学生であった蕭友梅は後にドイツに留学し，ライプチヒ大学で引き続き教育学と音楽を学んだ。帰国後，新文化運動を背景に，北京大学で音楽伝習所を開き，後に上海の租界に集めたロシア人音楽家の力を借りて，初めての国立音楽院を創立した。

以上概観したように，清末から民国初期にかけて築き上げた中国の音楽教育にはすでに二つの流れが存在している。それは所謂音大内教育と一般民衆向けの音楽教育である。それぞれの流れには，留学生たちの奮闘を伺うことができる。そして，彼等は身の置き所が違うが，同じく主体的に音楽を選択し，音楽教育に携わり，またそれを通して中国の近代化過程とかかわっていた。中国では，音楽及び音楽教育がその近代的人間の形成において不可欠であるという洞察は，彼等の共通する認識であろう。これからは，先ず時代の巨大な流れのなかで，彼らの音楽に対する関心の持ち方，その音楽に関する理論・思想が生まれる土壌を検証し，その音楽教育思想形成の軌跡を跡付ける。そしてそれによって彼等の考える音楽・音楽教育の人間形成の過程における意味・役割を明らかにする。また，二つの音楽教育の流れによって骨格化された図式を，それぞれの流れにいる人の音楽教育思想の対照及びその絡み合いの検証によって血肉化しようと考えている。

現段階では，先行研究として，榎本泰子が1996年に東京大学総合文化研究科に提出した博士論文「近代中国と西洋音楽一上海音楽学院を中心に」をあげることができる。当論文は中国国立音楽院の成立に中心的な役割を果たした蕭友梅を軸にし，その生涯を追う一方，同校の設立地である上海を中心に，中国の二十世紀二十年代から三十年代までの音楽事情や関係人物の事績などをも取り入れ，初めて中国の洋楽受容の視点から体系的にまとめた研究論文である。しかしながら，当時の上海は租界を持つため，商業が栄え，音楽を含む西洋文明が租界を窓口にして大量に流入してきて，また租界にはロシア人の音楽家も多数抱え，音楽都市としての土壌が肥えていた。つまりそのような上海は当時の中国では，極めて特異な存在であり，そこで開花した音楽はまた一般民衆にとって無縁のものにすぎなかったと言えよう。筆者はその視線を専ら上海と音楽専門学校に注いだため，同じく留日学生によって築かれた普通教育のなかでの音楽教育に関してはほとんど言及されていなかった。

管見に限り，榎本氏の研究のほかに，近代中国の洋楽受容を手がかりにし，中国の近代音楽教育をテーマにする研究はまだないようである。近代中国の普通教育の中の音楽教育（中国の場合，唱歌教育はその主であるが）に関心を寄せる研究は，とりわけ不毛である。したがって，近代中国の音楽教育に関する研究が，専門教育としての音楽教育に関する研究と普通教育のなかの音楽教育に関する研究と，有機的に結び付けて行われているわけではない。これからは，近代中国唱歌教育の成立過程に着眼し，それを明らかにさせるうえで，中国近代音楽教育思想が変遷する全容の明瞭化を狙いたい。

研究成果：

音楽教育が中国の近代教育の一環として定着するには，儒教の「礼楽」思想の支えによる部分が極めて大きいである。その「礼楽」思想の内実を明らかにするため，13 年度には，儒教の開祖である孔子の音楽教育思想（「樂」）について，研究がおこなわれた。その結果は，以下の通りである：

まず，孔子の音楽教育思想を捉える上での私の着眼点は，孔子の「詩に興こり，禮に立ち，樂に成る」（『論語』の泰伯篇）という発言に注目している。この条は，孔子が教育の人間形成の過程について語る言葉として知られ，「詩」から「禮」と「樂」へと，明らかに次第に高まっていく三つの段階を表す。従って，「樂」は人間形成の過程において，最高位な位置を占めており，最終段階とも位置付けられている。

私は孔子の人間形成の過程における「樂」の位置付けを手がかりにし，孔子の「樂」に対するとらえ方及び「樂」・「禮」・「詩」の相互関係を明らかにした。またその教育的意味についても検討を行った。

「樂」の字義の解釈として，「音楽」と「楽しみ」と二つの意味合いがある。従って，「禮樂」の「樂」には二つの意味合いがあると考えることができる。

また「樂」はこうした字義的解釈以外にも，歴史的，社会的な文脈において理解されてきてもいる。それはいわゆる「禮」と「樂」とをその不可分的な関係から「禮樂」として，祭祀にその起源を求める立場である。それによれば，祭祀の時に行われていた「禮樂」に含まれている「樂」にも，「音楽」と「楽しみ」という二つの意味合いを有している。そして，その二つの意味合いが，人間の喜び・楽しみなどの感情を表すものとして音楽が存在してきたというように説明されている。

孔子の時代になると，孔子はさらにそれを教科のなかにとり入れていた。つまり，「樂」の人間形成的な意味を重視し，その立場から「樂」の教育を展開したのは，孔子をもって嚆矢と見なされる。そして，孔子は「音楽」と「楽しみ」という二つの意味合いにおいて「樂」をとらえていた。しかも孔子は，音楽としての「楽」であれ，楽しみとしての「樂」であれ，「樂」というものに人間のあるべき姿を示す方向性を与えていた。孔子は，「音楽」をもって教養の最高の段階としていたし，「楽しみ」をもって人間の理想的境地と見なしていた。このことは，孔子が「樂」というものを人間形成的意味合いにおいて極めて重視していたことを物語っている。

「詩」「禮」「樂」それぞれがもつ人間形成論的意義，並びに三者の相互関係は：

第一に，「詩」は，人間感情の自然な発露を基盤とするものである。この内的心情がその役割を十全に果たすには，「詩」を学ぶことだけで尽くされるものではなかった。人間の「内」なる心情が，「外」なる制度や規範に向かうには，その「外」なるものによって，「内」にあるものが喚起される必要があったのである。

第二に，「禮」とは，基本的に，日常生活の礼儀作法から社会秩序に至るまで社会全般を規定する制度・規範であった。その意味で人間にとって「外」に存在するものであった。しかし，孔子はこの「外」なる制度・規範は，人間の「内」なる心情（親子・兄弟・朋友間に生ずる自然な親しみの感情）に支えられてこそ，安定的・調和的に機能すると見なした。孔子にとって，外面的規範としての「禮」は，構造的に人々の内的感情との相互関連を必要とするものなのであった。

第三に，「樂」とは，それを表現しようとする人間の「内」なる心情と，その表現である「外」なる形式を併せ持つものであった。すなわち，「樂」は「詩」や「舞」を含むことにおいて，「詩」とともに人間の自然感情を豊かにする働きがあり，またその儀礼という形式を「禮」と一体化する形で支える働きをもつものであった。「詩」が主に人間の「内」なる心情と関わり，「禮」が「外」なる制度・規範と関わるのに対し，「樂」はこの「内」と「外」との両者を備えていた。

この，人間形成における「内」と「外」という関心からすれば，人々は「詩」と「禮」を学び，両者を統合することで，個人と社会，感性と理性との統合をはかることが可能である。しかし，「詩」に見出される「内」と，「禮」に見出される「外」との統合は，両者を兼ね備えた「樂」の学びを通してこそ，より効果的に，またより包括的に行われることが期待される。「樂」は，人間の「内」と

「外」とが互いに助けあい，補完しあい，さらに両者を融合させるための包括的な教養なのであり，それゆえ孔子はこれを学問の最終段階に位置づけたのである。

以上は，孔子の音楽教育思想に関する考察である。清末から民国にかけて活躍して，中国近代音楽教育の基盤を築きあげた知識人は，留学するまえに伝統的な儒教教育をもうけていた。彼等は如何に音楽をとらえ，そして音楽の人間形成に対する役割に対して如何に認識したのであろうか？とりわけ，西洋音楽を受容するにあたって，彼等自身のなかに既に出来上がった儒教（特に「礼楽」）思想の枠組みは如何なる働きを果たしたのであろうか。儒教の開祖である孔子の音楽教育思想の特質を踏まえながら，以上の問題に留意し，今後の研究を展開していきたい。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科教育学専攻博士課程

中山間地域社会の活性化における新規参入者の位置づけ

—新規参入者，受け入れ団体，地域社会の関係を中心に—

土　居　洋　平*

1. 研究目的

近年，中山間地域においては過疎化と高齢化が著しくなりつつある。高齢化は全国的な現象であるが，各種の条件が不利である中山間地域では，とりわけ状況が厳しく，高齢化率も5割を大きく超えるところが多い。近年こうした地域において注目されていることが，UJIターンなどによる新規参入を活かした地域づくりである。こうした外部からの人口流入を前提にした地域活性化が注目を集めるのは，多くの中山間地域の場合には人口流出と高齢化の結果，自前での社会の維持が困難になりつつあるからである。また，とりわけ90年代以降，男女ともにIターンをする若者ないしIターンを希望する若者が増加してきているという背景もある。UIJターンについては，既に70年代から大きくとりあげられてきているが，「若者による単身の，しかも出身地域とは異なる地域への新規参入」という現象は，近年に特有の現象ということができよう。

しかし，こうした新しいタイプの新規参入については，その効果や短期的な定住への制度的支援のあり方を分析したものは多いが，その過程の分析，とくに新規参入にかかわる主な主体である，参入者，受け入れ団体，地域社会の関係を取り扱った研究は意外なほど少ないのが現状である。そのため，このような新しいタイプの新規参入者が地域社会においてどのような位置に置かれているのか，また，新規参入者と受け入れ団体，受け入れ団体と地域社会，新規参入者と受け入れ団体の相互の関係がどのような状態になっているのかについては，未だ明らかにされていないのである。そこで，本研究においては，この3者の関係を明らかにし，中山間地域の活性化という文脈の中で，新規参入者が置かれた位置について検討を行い，彼らが「定住」し得るかどうかについての考察を行った。

2. 研究の意義と方法

まず，事例について検討する前に，中山間地域へのUIJターンに関する先行研究について，中山間地域の活性化と人口流出の議論を中心にその整理を行った[1]。その結果，とりわけ農業外への新規参入について先行研究においては，ほとんど扱われていないことが明らかにされた。しかし，近年の中山間地域への新規参入希望者は必ずしも農業への就業を希望しているわけではなく，ライフスタイルとして農的な暮らしを希望している場合が多い[2]。こうした現状を踏まえれば，先行研究においては現状を把握しきれていないといわざるをえない。

そこで，本研究においては農業への新規参入および農業外への就業するかたちでの中山間地域への新規参入の事例の両方について検討を行うこととした。事例と着目点については，次節のとおりである。

3. 事例

事例においては，新規参入者本人に着目し，その経緯とそこにおける各主体間の関係について検討を行っていった。具体的には，島根県弥栄村「やさか共同農場」をその研修生のN氏を中心に，福島県昭和村「からむし